

明清の歴史小説と「艶」の概念について：『隋煬帝 艶史』と『隋唐演義』を中心に

河野，真人
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9622>

出版情報：中国文学論集．30，pp.34-51，2001-12-25．九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



明清の歴史小説と「艶」の概念について

——『隋煬帝艶史』と『隋唐演義』を中心に——

河 野 真 人

一、はじめに

周知のように中国明清時代には、「艶」や「情」そして「淫」等をテーマとした文学作品が数多く刊行された。それは正しく民衆文化の発展に伴って、当時の人々に於けるその類の文学作品の需要が増し、その必要に応じて起こった現象であつたと考えられよう。だがその一方で、これら「艶」「情」「淫」等をテーマとした作品は、為政者によって、害悪をもたらすものと見なされ、屢々禁毀の対象となつてきた。勿論裏を返せば、それだけこの類の作品の需要が多く、また流布していたと言える事にもなるのだが。

明末頃に成立したとされる小説『隋煬帝艶史』¹は、隋煬帝の生涯を扱った作品であるが、題名からも分かるように、隋煬帝と女性との絡みが多数描かれ、「艶」をテーマとした作品として実に相応しい作品と言える。但しそこに描かれる「艶」について考えた場合、それは単なる男女間の肉体関係を指すのではなく、もっと広い意味での男女関係²を指し、そしてその間に存在する、素直で生き生きとした感情の発露を言うのではないかと思われるのである。

『艶』とは一体何なのか。この問題は極めて深遠で壮大な上に、その意味は千変万化し、実に曖昧模糊としている。従つて我々としては、目前の問題をそれぞれ着実に究明していく事により、大きな問題解決の糸口を見つけてゆく他無いであらう。そこで、本稿では前に挙げた『隋煬帝艶史』を中心に、そして同時代の「艶」をテーマと

した文学作品を比較考察する事で、明清に於ける「艶」概念のあり様について考えてゆきたい。

二、隋唐を扱った文学作品と『隋煬帝艷史』

明代から清代にかけて、唐王朝を興す、所謂興唐故事を扱った小説が多数刊行されている。具体的な書名を挙げると『唐書志伝』『隋唐兩朝史伝』『大唐秦王詞話』『隋史遺文』『隋唐演義』『說唐演義』であり、これらの作品間には極めて深い関係が存在する。小松謙氏は『中国歴史小説研究』⁽⁴⁾で次のように述べる。

『唐書志伝』の系統は、史書の体裁で唐の歴史を語るべく、その開国の発端にあたる李淵の挙兵から物語を始める。これは……「按史」「按鑑」を称する明代歴史小説に共通する教養書意義に基づく製作態度と言ってよろう。……それに対し『隋史遺文』の系統には史書の形式にこだわらない、あくまで面白い話を提供しようとする物語作者としての意識が顕著に認められるのである。この意識の差は、小説作者・出版者の意識の変化を示すものであると同時に、受容者の側にもある種の変化が生じていることを示唆しよう。『隋史遺文』系統の読者にとっては、歴史小説が歴史的知識を得るための教養書であることを強調する必要はもはやなくなりつつあったのではあるまいか。⁽⁵⁾

唐王朝を興すという事は、言い換えれば隋王朝が滅亡することを意味する。すなわち興唐故事を語る上で、隋煬帝は欠かすことのできない人物であり、隋煬帝の生涯を扱った『隋煬帝艷史』は、これらの作品群中に組み入れられるべき作品であると考えられる。これについては、歐陽健氏の論文「『隋唐演義』綴集成帙考」⁽⁶⁾で『隋唐演義』が、『隋煬帝艷史』と『隋史遺文』を繋ぎ合わせ、更に作者の独創を付け加えて成立した作品であると述べられており、『隋煬帝艷史』『隋史遺文』と『隋唐演義』との襲用関係の存在を明らかにしている。従って少なくとも『隋煬帝艷史』は『隋唐演義』と深い関係を持つ事になるのだが、それでは果たして『隋煬帝艷史』は前に挙げた興唐故事を扱った歴史小説群の中に組み入れても良いと言えるのだろうか。

『唐書志伝』以下六作品、及び『隋煬帝艷史』の成立時期は以下のように考えられる。

明清の歴史小説と「艶」の概念について

・『唐書志伝』——嘉靖三十二年（一五五三）楊氏清江堂刊本。首に嘉靖癸丑李大年序。

・『隋唐兩朝史伝』——萬曆四十七年（一六一九）金閨龔紹山刊本。

・『大唐秦王詞話』——編次者、澹圃主人が作者としている諸聖隣は萬曆三十五年（一六〇七）の進士であり、また第五十八回の首に引く詩に、閏三月の事が詠んであることから、萬曆十九年（一五九一）頃の作と思われる。

・『隋煬帝艷史』——崇禎四年（一六三一）野史主人の序。

・『隋史遺文』——崇禎六年（一六三三）吉衣主人の序。

・『隋唐演義』——四雪草堂刊本に正徳三年（一五〇八）林翰の序、次に康熙三十四年（一六九五）褚人獲の序。前の林翰の序は『隋唐兩朝史伝』のものとはほぼ同じで、成立はおそらく後者の序の年号に拠るべきと思われる。

・『説唐演義』——乾隆元年（一七三六）如蓮居士の序が、乾隆四十八年（一七八三）の觀文書屋重刊本の卷首にある。

よって、『隋煬帝艷史』は序が書かれた年代からすれば、『隋史遺文』とはほぼ同年代の作品と考えられ、これは『隋煬帝艷史』『隋史遺文』の両作品が『隋唐演義』成立に係わっているという考えが間違っていない事を示している。すなわち、①興唐故事には隋煬帝故事は欠かせない事、②『隋煬帝艷史』と『隋唐演義』間には襲用を含む密接な関係がある事、③『隋煬帝艷史』の成立時期が他の小説とは大幅に外れていない事、以上の三点から考えると『隋煬帝艷史』は、これら興唐故事を扱った作品の中に組み入れても良さそうに思われる。

しかしながらその中で『隋煬帝艷史』の立場は微妙で、またその関係は特殊であることも事実である。興唐故事を扱った小説及び『隋煬帝艷史』は、扱っている時代が隋時代から唐時代の最初辺りである点は共通している。但しそれぞれの主題としているものは些か相違がある。これについては、前に挙げた小松氏の主張の引用部分に明らかにされているように、『唐書志伝』『隋唐兩朝史伝』『大唐秦王詞話』の三書は、歴史事実を基に唐高祖李淵及び唐太宗李世民的、正に興唐の故事が描かれている。そして『隋史遺文』『隋唐演義』『説唐演義』の方は、歴史事実

を基にしながらも、秦叔宝、尉遲迴德といった、どちらかと言えば歴史の中で、比較的裏方的存在の人物に焦点を当てている。言うなれば『水滸伝』に出てくる多くの無頼漢と酷似する役回りである。

それでは、『隋煬帝艷史』はどのようなのか。冒頭でも述べたように、主役はあくまでも隋煬帝であり、重点は宮女との交わりに置かれている。しかしながら隋煬帝は、他の興唐故事を扱った小説中では、僅かに『隋唐演義』前半中の『隋煬帝艷史』を襲用したと思われる箇所、隋煬帝を中心として第一人称的に扱っている箇所が目立つ程度であり、その殆どは主人公として扱われるよりも、むしろ主人公に対する敵役であったり、或いはただ単に歴史の表舞台の人物として扱われているだけの存在であって、出番も少量に限られている。『隋唐演義』の『隋煬帝艷史』襲用箇所にしても、その割合は作品全体からすると極めて少量であって、隋煬帝の扱われ方を考えた時に、『隋煬帝艷史』と他の作品間でかなりの相違があると言えよう。

此処で重要な問題として取り上げたいのが、男女の描写の相違についてである。『隋煬帝艷史』は、宮廷及びその周辺を舞台とした男女の絡みが多く、従って女性の描写は多数存在する。そして『隋煬帝艷史』「凡例」中に、煬帝は千古の風流天子であり、その一挙一動は、全て耳目を悦ませしめ、艷に対して羨望を抱かせる。故に此の作品に『艷史』と名付けた。

と述べられているのを始めとして、この作品が殊更「艷」を意識して描いている事が、序や本文から読み取れるのである。それに対し『隋唐志伝』等六作品は、どちらかと言えば、女性の描写は少なく重要度も低い。確かに『隋唐演義』に関しては、前半部は『隋煬帝艷史』を襲用したとされる宮廷での男女描写があったり、或いは後半部に於いて則天武后や楊貴妃の登場等、女性に関係した描写も目立つ。しかしながら、それは物語に厚みを増す為のいわば副次的な要素に過ぎず、作品の目指すものは、あくまでも秦叔宝、尉遲迴德等の活躍を面白く描こうとする態度が窺えるのである。

『唐書志伝』『隋唐兩朝史伝』『大唐秦王詞話』『隋史遺文』『隋唐演義』『説唐演義』の六小説は歴史に基づいた作品であることから歴史小説と称されるのと同時に、講史小説とも称される。そもそも講史小説とは、元来講釈師の語り物をもととしているが、しかしながら明代そして清代と時代が移り変わると共に、次第に講釈師による語り物

明清の歴史小説と「艷」の概念について

の性格は失われていった。従つて明清時代に於いては、「講史小説」という言葉の意義が確立できないのが実状であるのだが、さて『隋煬帝艷史』をこの観点から考えると、隋煬帝という歴史上の人物を扱い、また運河開鑿や万里の長城の修築等、歴史事実が多数収められている。すなわち歴史に基づいた作品であることから「歴史小説」と言うことは可能であると言えよう。ただ「講史小説」となるとどうなのか。いま述べてきたように、『隋煬帝艷史』は『唐書志伝』等の小説の中に簡単に組み入れることができない作品である。そしてその要因のひとつは、『隋煬帝艷史』の持ついわば「艷」の性格に深く係わるのではあるまいか。以下襲用関係があると思われる、『隋煬帝艷史』と『隋唐演義』を比較検討することで、その両作品の持つ性格を明らかにしたい。

三、『隋煬帝艷史』と『隋唐演義』

『隋唐演義』序では次のように述べられている。

昔鐘庵袁先生、曾示予所藏『逸史』、載隋煬帝朱貴兒、唐明皇楊玉環再世因緣事、殊新異可喜。因與商酌、編入本傳、以爲一部之始終關目。合之『遺文』『艷史』、而始廣其事。極之窮幽僊證、而已竟其局。其間闕略者補之、零星者刪之。更採當時奇趣雅韻之事點染之、彙成一集、頗改舊觀。

昔、鐘庵袁于令先生が、私に所藏の『逸史』を見せてくれた。其処には隋煬帝と朱貴兒、唐明皇と楊玉環の転生の事が描かれており、極めて斬新で素晴らしく正に喜びに値するものであった。よつて共に吟味して、本伝に挿し入れ、一部始終の関目となした。『隋史遺文』と『隋煬帝艷史』を綴り合わせ、その話は始まる。そして究極には幽界や仙界の故事に及び、その話が終わる。その間の欠落している所は補つて、半端な所は削る。更に当時の素晴らしく興味深い故事を取り上げて付け加え、一つに集成してみると、頗る今までの見方を改めるものがある。

すなわち『隋唐演義』は『隋史遺文』と『隋煬帝艷史』を綴り合わせ、その素晴らしく、興味深い故事を描き、そして新たな物語を創作しようとしているのである。此の様な『隋唐演義』に於いて、『隋煬帝艷史』が拘った「艷」

は如何なる受容が為されたのであろうか。

『隋唐演義』は前半部と後半部に大きく分かれており、前半部は隋煬帝時代、そして後半部は則天武后及び玄宗楊貴妃時代が背景となっている。今回特に見てゆく前半部分は、序文及び前に述べた歐陽健氏の論文等から明らかに、『隋煬帝艷史』との襲用関係がある。具体的には『隋唐演義』中の十七回の箇所について、『隋煬帝艷史』との関係が見られるのだが、『隋煬帝艷史』の取り入れ方は、比較的割合が少なく、その順番もまちまちで、変更や省略点が目立つなど、作者が必要に応じて任意に取捨選択し挿し挟んでいる。具体的な襲用関係については、歐陽健氏の論文に譲るとして、『隋唐演義』が『隋煬帝艷史』の如何なる故事を選択したのか、実際に見てゆきたい。まず『隋煬帝艷史』に於いて、如何なる部分が『隋唐演義』に引かれているのかを見てみたい。以下は『隋煬帝艷史』の表題である。ゴチック文字で表された部分が『隋唐演義』に引かれた部分で、付された数字はその回数である。また、「艷」を考える上で欠かすことの出来ない、男女関係を描写した箇所には、「◎」印をそれぞれ付す。

(表①)

『隋煬帝艷史』		『隋唐演義』	
回数		回数	
第一回	◎ 隋文帝帶酒幸宮妃	(1・2)	◎ 獨孤后夢龍生太子
第二回	◎ 節名節盡孝獨孤	(1)	◎ 蓄陰謀交勸楊素
第三回	◎ 正儲位謀奪太子	(2)	◎ 侍寢宮調戲宣華
第四回	◎ 不發喪楊素弄權	(19)	◎ 三正位阿摩登極
第五回	◎ 黃金盒賜同心	(19・20)	◎ 仙都宮重召人
第六回	◎ 同釣魚越公恣志	(20)	◎ 撻宮人煬帝生嗔
第七回	◎ 選美女楊素強諫	(20)	◎ 受矮民王義淨身
第八回	◎ 逞富強西城開市	(27)	◎ 擅兵戈薊北賦詩

明清の歴史小説と「艷」の概念について

第九回	◎	文皇死報奸雄	(20)	◎	煬帝大窮土木	(27)
第十回	◎	東京陳百戲		◎	北海起三山	(27)
第十一回	◎	泛龍舟煬帝揮毫	(34)	◎	清夜遊蕭后弄寵	(34)
第十二回	◎	會花陰妥娘激寵	(39)	◎	舞後庭麗華索詩	(39)
第十三回	◎	攜雲傍輦路風流	(28)	◎	剪彩爲花冬富貴	(28)
第十四回	◎	煬帝讀史修城	(34)	◎	慶兒極君魔夢	(34)
第十五回	◎	怨春偏侯夫人自縊	(28)	◎	失佳人許廷輔被収	(29)
第十六回	◎	明霞觀李	(29)	◎	北海射魚	(29)
第十七回	◎	袁寶兒賭歌博新寵	(29・30)	◎	隋煬帝觀圖思舊遊	(30)
第十八回	◎	耿純臣奏天子氣	(31)		蕭懷靜獻開河謀	(31)
第十九回		麻叔謀開河	(32)		大金仙改葬	(32)
第二十回		留侯廟假道	(32)		中牟夫遇神	(32)
第二十一回		狄去邪入深穴	(32)		皇甫君擊大鼠	(32)
第二十二回	◎	美女宮中春試馬	(34)		奸人林內夜逢魑	(34)
第二十三回		陶榔兒盜小兒			段中門阻諫奏	
第二十四回		司馬施銅刑惧佞			偃王賜國寶愚奸	
第二十五回	◎	王弘議選殿脚女		◎	寶兒賜司迎輦花	
第二十六回		虞世南詔題詩	(36)		王令言知不返	(36)
第二十七回		種楊柳世基進謀	(40)	◎	畫長黛絳仙得寵	(40)
第二十八回		木鵝開河	(40)		金刀斬佞	(40)
第二十九回	◎	靜夜聞謠	(47)	◎	清宵玩月	(47)
第三十回	◎	幸迷樓何稠獻車			賣荔枝二仙警帝	

第三十一回	◎ 任意車處女試春		◎ 烏銅屏美人照艷	
第三十二回	◎ 丹藥留春	(47)	◎ 冰盤解燥	(47)
第三十三回	王義病中引諫		◎ 雅娘花下被擒	
第三十四回	◎ 賜光綾蕭后生妬		◎ 不薦寢羅羅被嘲	(50)
第三十五回	◎ 來夢兒車態怡情		◎ 裴玄真宮人私侍	(46)
第三十六回	下西河世民用計		◎ 賜雙果絳仙獻詩	
第三十七回	◎ 水飾娛情		◎ 鑒形失語	
第三十八回	◎ 觀天象袁充進言		◎ 陳治亂王義死節	
第三十九回	◎ 宇文謀君	(47)	◎ 貴兒罵賊	(47)
第四十回	弑寢宮煬帝死	(47)	燒迷樓繁華終	(48)

また、この表と対応させて、次に『隋唐演義』中に見える『隋煬帝艷史』に描かれた故事について、主なものを以下に挙げる。() 内には『隋煬帝艷史』に於いて第何回に描かれている故事なのかを示し、前と同様、男女関係が描写されている故事には各々「◎」印を付す。(表②)

『隋唐演義』		『隋煬帝艷史』	
回数		回数	
第一回	・ 独孤后の性癖	(1)	・ 煬帝誕生
	・ 賢人を装う煬帝	(2)	
第二回	・ 皇太子廃立の企て	(2)	・ 皇太子廃立
	◎ 独孤后と尉遲迥妃	(1)	
第十九回	◎ 宣華夫人への求愛	(3)	・ 文帝崩御
			(4)

明清の歴史小説と「艷」の概念について

第二十回	◎ 同心結の贈答	(5)	・ 楊帝即位	(4)
	◎ 蕭后の嫉妬	(5)	・ 宣華夫人の死	(6)
	・ 楊素との魚釣	(6)	・ 「解生」の鯉	(6)
	・ 楊素の死	(9)		
第二十七回	・ 顯仁宮と西苑の造営	(10)	◎ 十六院夫人の選出	(10)
	・ 王義の献上	(7)	◎ 御女車の制作	(13)
	・ 秦夫人のもてなし	(13)	・ 王義の献上品	(13)
	◎ 侯夫人の自殺	(15)		
第二十九回	◎ 袁紫烟の天象觀察		◎ 玉李と楊梅	(16)
	◎ 「解生」鯉のその後	(16)	・ 盜賊討伐と李淵	(17)
	◎ 袁宝兒	(17)		
第三十回	◎ 宮女達の歌比べ	(17)	◎ 木蘭の花見	(17)
	◎ 楊州図	(17)		
第三十一回	◎ 薛治兒の劍舞	(18)		
第三十二回	・ 運河着工	(18)	・ 狄去邪と皇甫君	(21)
第三十三回	・ 麻叔謀の子供誘拐	(23)	・ 睢陽住人の賄賂	
第三十四回	◎ 妥娘と桃花	(12)	◎ 煬帝の奇病	(22)
	◎ 望江南八首	(11)	◎ 『清夜游』曲作成	(11)
第三十五回	◎ 清夜の宴	(11)	◎ 薛治兒の乗馬	(22)
第三十六回	・ 運河の完成	(25)	◎ 虞世南と詔書	(26)
第三十八回	◎ 伝脚女の選定	(29)		
第三十九回	◎ 陳後主と張麗華夫人	(12)		

第四十回	◎ 江都への出発	(27)	◎ 楊柳の植樹	(27)
	◎ 吳絳仙	(27)	◎ 麻叔謀の処刑	(28)
第四十六回	◎ 李密の反乱	(35)	◎ 李淵の挙兵	(35)
第四十七回	◎ 迷楼宮の造営	(50)	◎ 二十四橋の宴	(29)
	◎ 宇文化及の反乱	(39)	◎ 煬帝の落胆	(37)
	◎ 独孤盛、開遠の奮闘	(39)	◎ 朱貴児の絶叫	(39)
	◎ 蕭后との別れ	(39)	◎ 煬帝の最期	(40)
第四十八回	◎ 宮女達のその後	(40)		
第五十回	◎ 宇文化及の死	(40)		

以上二つの表から、『隋煬帝艶史』と『隋唐演義』の二作品の性格を幾つかの点から考えてみたい。

▼『隋煬帝艶史』の記述で『隋唐演義』中に引かれていない部分

表①を見ると『隋煬帝艶史』の殆どの箇所が、『隋唐演義』に引かれている事が分かる。勿論これは対聯式に付された題目を調査した範囲の話であり、細かい故事それぞれにまで調査すれば、他にも引かれていない部分は存在するであろうが、今回の研究では紙幅の関係もあり、その存在の確認だけに止める。男女描写との関係もあまり拘りは感じられず、作者の都合の良いように引用していったと考えるのが妥当であろう。

では逆に引用されていない部分についてはどうだろうか。表①から判別するに、「薊北への行幸」「運河開鑿」「迷楼宮」の大きく分けて三部分が挙げられる。それぞれ理由を考えると、以下のようなになる。

・「薊北への行幸」……………隋煬帝の話ではあるが、話自体が面白味に欠ける。

・「運河開鑿」……………直接隋煬帝が絡まない部分なので、全てを選択する必要性がない。

・「迷楼宮」……………男女描写に偏重し過ぎで、全てを取り上げると主役の秦叔宝側の話が進まないばかりか、作品の雰囲気を変えるおそれがある。

明清の歴史小説と「艶」の概念について

今はまだ推測の域を出ないが、これらの理由が微妙に絡んでいたものと思われる。

▼『隋唐演義』に引用された故事

表②をみると、量にしてみれば『隋唐演義』に占める割合こそ低い⁽⁹⁾が、数だけを考えたと実に多くの故事が引かれていることが分かる。また、その約半数は男女描写の係わったものであり、その類の故事を敬遠していたとは言い難い。但し、『隋唐演義』に引かれる過程で、改変されて部分的に省かれていったものも少なくない。特に顕著なのは『隋唐演義』第二十七回と第四十七回であり、表を見ても明らかのように、一回の中に実に多くの故事を詰め込んでおり、その結果それぞれの内容が簡素化されていく傾向にある。

もうひとつは故事の引き方について。表②の『隋唐演義』の回数を見ても分かるように、比較的集中して配置されているのが分かる。すなわち作者が秦叔宝側と隋煬帝側とを、続けて読ませようとしている事が分かるのである。

▼歴史事実について

表には直接示していないが、『資治通鑑』『隋書』等載っている所謂史実とされるものは、『隋煬帝艷史』『隋唐演義』の両方に殆どが描写されている。その意味では此の二作品は共に歴史に基づいた「歴史小説」と言うことができる証明ともなるのだが、此処にひとつ大きな問題がある。それは『隋煬帝艷史』に於ける、高句麗遠征の扱いについてである。つまり『隋唐演義』には扱いがあるが、『隋煬帝艷史』には高句麗へ恭順を促す詔書は贈るものの、それ以上の遠征に関する描写は無いに等しい。『隋煬帝艷史』「凡例」中に、

煬帝に関しては華やかで佳麗な故事が非常に多く、風流で雅な情愛は全て採り上げている。三度遼東に行幸し⁽⁹⁾た事、汾陽で避暑した事等は、平凡で面白味に欠けるので、省略し載せていない。

と述べられているように、面白味が無いという理由で省かれたというのも確かに理解できなくもない。ただ運河開鑿に匹敵する隋煬帝の業績（結果失敗に終わるが）である高句麗遠征の故事を、果たして面白味に欠けると見なす事ができるだろうか。

これは勿論今まで再三述べて来たように、『隋煬帝艷史』の「艷」に対する拘りから来るのだと思われる。すなわち隋煬帝「艷」史の立場から考えると、高句麗遠征は、やはり物語としての面白味に欠けるのである。高句麗遠

征に宮女を絡ませるわけにはゆかないし、隋王朝及び隋煬帝の失墜は、豪奢や女色から始まるのが此の作品には相応しいのである。しかし『隋唐演義』では流石に無視することができず、『隋史遺文』から引かれている事もあって、しっかり描写されている。

以上の事から、『隋唐演義』の作者が『隋煬帝艶史』所収の故事を、どのように受け止めていたか推測できる。つまり『隋唐演義』の作者は、まずは次に挙げる四点の意識を持って、『隋煬帝艶史』を襲用したのではなからうか。

- ① 歴史事実には則す則さないという事には拘らない
- ② 男女描写が為されているものも積極的に取り込む
- ③ 隋煬帝に関しては、なるべく男女描写を反映させる
- ④ 「艶」への過度の偏重は避ける

此の事から、『隋唐演義』の作者は秦叔宝等の活躍の故事を描く上で、一種のスパイスの様な形で、『隋煬帝艶史』所収の故事を挿し挟んだのではなからうか。秦叔宝側の話が続くと、所謂男性だけの武俠物に偏りがちになる。それでは物語全体が偏頗なイメージになりがちで、面白みに欠けると判断し、そこで宮女達の登場する隋煬帝周辺の故事を挿し挟むことで、そのイメージを和ませ、作品全体の単調さを取り除こうとしたとは考えられないだろうか。

明代そして清代へと時代が移ってゆくにつれ、庶民文化が発展していく事で、文学作品は、創造する側も、そしてそれを需要する側も、一般大衆が主役となってくる。そのような流れの中で、講史小説もその需要に応えるべく必然的に変容していった。『隋唐演義』はそんな時代が創り上げた、講史小説の中のひとつの発展形態と言えるだろう。本来「史」を「講」じるはずの講史小説であるが、そこに男女描写を挿し挟み、「艶」を匂わせることで、更なる面白味を加える。『隋唐演義』はその様な変容を遂げた作品であるが、その変容こそが、明清に於ける時代の流れの中で、読者が求めていったものではなからうか。

四、『隋煬帝艶史』成立時に於ける「艶」の意識

明清の歴史小説と「艶」の概念について

上節で述べた様に、「艶」は明清時代の読者、すなわち一般大衆が求めていた通念のひとつと考えられる。では、当時「艶」は如何なる受け止め方が為されていたのか、以下に考えてみたい。

前述の如く『隋煬帝艶史』は序の崇禎四年（一六三一）の年号から、明代末の作品と考えられる。当時は『金瓶梅』『西廂記』等を筆頭に、「艶」や「情」をテーマとした文学作品が多数刊行されていたのだが、では果たしてそれらの作品は「艶」や「情」に如何なる意義を持たせたかったのだろうか。特に「艶」について考えてみたい。

明代及び清代に於いて、為政者によって禁忌対象に指定された文学作品を見てゆくと、『隋煬帝艶史』を始めとして、「艶」そのものを題名に使った作品が存在する事に気付く。いま具体的にそれらの作品を見てみたい。

『桃花艶史』は六卷十二回。作者及び成立年代は不詳である。但し道光年間に禁毀の対象になっている事から、それ以前すなわち清代中期以前の作である。内容は、時代は唐朝の蘇州人、康建という人物が、蟠蟠山の桃樹を持ち帰り大切に育て、その樹の精霊が康建とその娘の金桃児を助ける話である。ただ、康建の桃園では、破落戸の白守義、そして妻の劉氏、侍女の春梅、秋月、妾の胡子らと荒淫の限りを尽くす。最後には白守義は自らの咎で処刑され、金桃児は相思相愛の仲である李輝枝と共に山にこもり、幸福な生活を送る。この話の中心は、白守義とその周辺の人物との淫行で、実に生々しく猥褻な印象を受ける。

『巫山艶史』は四卷十六回。作者は不詳で、成立年代は今現在残っている嘯花軒刊本の嘯花軒から判断するに、清初康熙年間頃の作と思われる。内容は、時代は北宋末の蘇州人、李芳という人物が、広陽道人と出会い、丹葉一粒と錦囊三袋を貰い、錦囊の効能で危難を避けながら、多くの女性と出会い妻にしてゆく話である。此の李芳が次々と多くの女性を相手にしてゆくという内容から、男女関係を数多く描写し、しかも肉体関係に及ぶ事も多い。全体には猥褻なイメージが拭えない作品と言えよう。

『妖狐艶史』は一卷十二回。作者は扉に「松竹軒編」と署されているものの、不詳である。成立年代については不詳であるが、『桃花艶史』と同様清の道光年間に禁毀の対象となっておりことから、それ以前の作と考えられる。内容は宋代の江西青峰嶺に二匹の妖狐が居り、美女に化けて春明媚という男性と深い仲となる。その後春明媚は月素仙子という狐の仙人に、前世で助けて貰ったお礼にと、様々な恩返しを受ける話である。此の作品に関しては、

春明媚と美女に化けた二匹の妖狐の關係など、やはり男女關係、それも肉体關係まで描写した部分が存在している。従つて全体的に猥褻な印象は拭えない。

『飛花艶想』は一巻十八回。作者は樵雲山人で、山西太原の劉璋の号である。成立年代については樵雲山人の序に「己酉」の年号があり、これは康熙六年もしくは雍正七年を指していると考えられる。内容は明嘉靖年間の浙江人の柳友梅と、杭州府雪太守の娘の雪瑞雲及び彼女の従姉妹の梅如玉の二佳人との話で、柳友梅と二佳人は柳友梅の詠んだ詩を通じて知り合い、共に惹かれてゆくが、劉有美なる悪役に様々な妨害を受けてしまう。結局二佳人は柳友梅と一緒に、後に娶った三人の夫人を含め幸せな日々を送る。この作品は前の三作品とは違い、男女關係の描写はあるものの、極めて純粹で肉体關係を想像させる部分は存在しないと云つて良い。所謂「才子佳人小説」と称されるもので、その性質は前の三作品とはかなりの部分で異なると言えよう。

以上「艶」を題名に含む四作品について見てきた。これらの作品は成立年代を考えると、余り大きな差はなく、ほぼ同じ時代背景下に創作された作品と言える。

そしてまず『桃花艶史』『巫山艶史』『妖狐艶史』の三作品に於いて、「艶」の示唆するものは同様であると見なすことができる。それは男女關係であり、しかも肉体關係まで及ぶ猥褻なものである。これらは全て「一艶史」と言う題名である事から、成立に関し三作品間に於いて深い關係があったとも考え得る。それに対し『飛花艶想』の「艶」は、男女關係を指すものではあるものの、それは決して肉体關係ではなく、猥褻さを感じさせるものではない。従つて前の三作品との違いは明らかなのである。

翻つて『隋煬帝艶史』に於いてはどうなのか。筆者のこれまでの研究から得た考えは、単なる肉体關係を指し示すものではないという事である。すなわち『隋煬帝艶史』には肉体關係を描写した部分はあるものの、それは部分的なものであり、終始猥褻な印象を持たせる作品では決していないのである。従つて同じ「一艶史」という題名を使つてはいるものの、『桃花艶史』『巫山艶史』『妖狐艶史』中の「艶」とは明らかな相違がある。また、『隋煬帝艶史』は作品の長さも長く、描写も生き生きとしており、面白味も格段に感じられる。この様な事から『桃花艶史』『巫山艶史』『妖狐艶史』は質量共に、文学作品としての完成度という点に於いて『隋煬帝艶史』に遠く及ばないので

ある。

五、まとめ

此処まで『隋煬帝艷史』を中心に、部分的な調査ではあるが、明清時代の文学作品に於ける「艷」について考えてきた。『隋煬帝艷史』の「艷」描写は、『隋唐演義』の中で所謂武俠物に偏重しがちな話の流れの中で、いわばスパイスの役割を果たし、物語が単調になるのを避けてきた。そしてそのスパイスこそ、大衆化した明清時代の文学に於いて、読者、そして作者の求めに応じて発展していった社会通念なのである。

それにしても、『隋唐演義』のスパイスの振り分けは、その振り分ける場所、量ともに絶妙と言え、その結果、歴史小説の役割を果たしながら、一方で面白い話を提供し、更に宮廷での男女描写を組み込んで、話に変化を付けている。筆者は今までの研究過程に於いて、『隋煬帝艷史』を完成度の高い作品と見なし、その地位を『金瓶梅』と同等とまではいかなかったも、それに近いレベルまで引き上げ得る事を主張してきた。そして今回、『隋唐演義』との兼ね合いを考察することで、『隋唐演義』が、『隋煬帝艷史』とはまた違った形での、極めて文学的価値の高い作品である事が判明した。確かに『隋唐演義』は、『隋煬帝艷史』を始め先行作品の襲用箇所が多いのも事実だが、それを完成度の高い作品に纏め上げた業績は認めるべきであろう。

さて最後に『隋煬帝艷史』は、如何なる性格の作品なのかを考えてみたい。『隋煬帝艷史』は、文字通り隋煬帝という実在の皇帝に取材した作品である。また『隋唐演義』への襲用など、興唐故事を扱った歴史小説との関係も深い。従ってこの観点からは歴史小説と言う事ができる。しかしながら、いままで述べてきたように『隋煬帝艷史』は、「艷」に限りなく拘った作品であり、その志向するところは、男女間に於ける素直な感情の発露を、生き生きと描写する事であり、興唐故事を扱った歴史小説とは性格の異なった作品と言えよう。また、『隋煬帝艷史』は「艷」に拘っているとはいえず、その内容は肉体関係を描写するだけの、単なる猥褻な作品には止まっていない。前に挙げた、題名に「艷」を使った作品の中で、特に『桃花艷史』『巫山艷史』『妖狐艷史』とは、同じ「艷史」の

名を持ちながらも、その内容は異なっているし、文学的価値も明らかに優るのである。

此の様な『隋煬帝艷史』の性格を考える上で、極めて重要な鍵となるのが『金瓶梅』の存在である。周知の如く、『金瓶梅』の第一回から第六回までの部分は、『水滸伝』をもとにしている。そしてその『水滸伝』は、全てが歴史事実ではないものの、歴史に基づいた作品である事は言うまでもない。従って、その『水滸伝』をもとにしたという事は、少なからず歴史との関わりがあると言える。また多数の男女描写がなされているが、単なる猥褻な作品とは言いがたい。例えば魯迅『中国小説史略』第十九篇「明の人情小説（上）」の『金瓶梅』解説部分には次のように述べる。

作者の世情に対する洞察は、まことに犀利を究めているといえよう。およそその表現は、或いはのびのびと明確にし、或いは曲折に富み、或いはまざまざと目に見えるように克明な絵にし、あるいはほかして譏笑を込め、或いは同時に両面を描いて対照の妙を為しているので、変化してやまぬ実情が至る所で明らかになっている。⁽¹²⁾

……此の書がもっぱら市井の淫乱な男や女を描くために書かれたとする説は、本文の実際と全く符合しない。⁽¹³⁾すなわち、歴史に基づいた舞台設定、そして単なる猥褻には止まらない男女描写という点に於いて、『隋煬帝艷史』は『金瓶梅』と同じ性格を持っていると言える。確かに、『金瓶梅』の主人公西門慶は、隋煬帝すなわち皇帝とはかけ離れた立場の人物であり、また『金瓶梅』の価値のひとつである当時の日常描写の充実振りは、『隋煬帝艷史』には欠けているなど、異なる点も存在する。ただこれまでの考察から、『金瓶梅』が後の『紅樓夢』に影響を与えた、その所謂「人情小説」という流れの中に、『隋煬帝艷史』は組み入れられるべき作品だと筆者は考えるのである。

これまで『隋煬帝艷史』は、比較的注目を浴びることの無い作品であった。それは作品の完成度の低さもあっただろうが、今回の考察で明らかになったように、『隋煬帝艷史』の持つ微妙で曖昧な性格から、敬遠されてきたという理由からかも知れない。また或いは、「艷史」という書名が、前に挙げた『桃花艷史』等の作品の如く、単なる猥褻な作品と見なされ続けてきた結果とも考えられる。いずれにせよ、『隋煬帝艷史』を人情小説の中に組み入れて、焦点をあてて考察する事は、明清時代の人情小説を始めとした「艷」や「情」等をテーマとする作品の分析に、極めて有効かつ有益になるものと思われる。ただ『金瓶梅』との関係を含めた、人情小説としての『隋煬帝

『艶史』の更なる考察については、稿を改めて論ずる事にしたい。

注

- (1) 『隋煬帝艶史』の作品及びその成立については、拙稿『隋煬帝艶史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について(『中国文学論集』第二十八号)を参照。
- (2) 拙稿『隋煬帝をめぐる「艶」について——『艶異編』と『隋煬帝艶史』の「艶」描写を通して——』(『九州中国学会報』第三十九号)。
- (3) 『古本小説集成』(上海古籍出版社)所収。
- (4) 小松謙『中国歴史小説研究』(汲古書院、二〇〇一)。
- (5) 『唐書志伝』系列は『唐書志伝』『隋唐兩朝史伝』『大唐秦王詞話』が、『隋史遺文』『隋唐演義』『説唐演義』がそれぞれ属する。小松氏は同時に、此の二系列の分化が、伝承地域の相違に由来している可能性を述べておられる。
- (6) 欧陽健『隋唐演義』“綴集成帙”考(『文献』一九八八年第二期)。
- (7) 本文「煬帝爲千古風流天子、其一舉一動、無非娛耳悅目、爲人艶羨之事、故名其篇曰『艶史』」。
- (8) 『東京夢華錄』卷五「京瓦技芸」中には「講史」の文字が見え、講釈師の名が並ぶ。又『夢粱錄』卷二十「小説講經史」中には「講史書者、謂講説『通鑑』・漢・唐歷代書史文傳、興廢爭戰之事。」とあり、当時の「講史」の実態が述べられている。
- (9) 本文「煬帝繁華佳麗之事甚多、然必有幽情雅韻者方採入。如三幸遼東、避暑汾陽等事、平平無奇、故略而不載。」
- (10) 王曉伝輯録『元明清三代禁毀小説戲曲史料』(作家出版社、一九五八)等参照。例えば江蘇省の淫詞小説を禁ずる法令に『隋煬帝艶史』『隋煬帝艶史』、『桃花艶史』等の書名が挙がっている。
- (11) 『桃花艶史』『巫山艶史』『妖狐艶史』『飛花艶想』は例えば『中国歷代禁毀小説集粹』(台灣雙笛國際出版社、一九九

五（一九九六）所収。

- (12) 本文「作者之于世情、蓋誠極洞達、凡所形容、或條暢、或曲折、或刻露而盡相、或幽伏而含譏、或一時并寫兩面、使之相形、變幻之情、隨在顯見。……至謂此書之作、專以寫市井間淫夫蕩婦、即與本文殊不符。」本文訳は中島長文氏の訳注（東洋文庫、一九九七）を参考にした。

- (13) 日下翠『中国戯曲小説の研究』（研文出版、一九九五）第七節『金瓶梅』作者考」には次の様に述べる。『金瓶梅』の価値は、そのストーリーの進展起伏にあるのではなく、それまでの話本にはみられなかった、日常生活の緻密でリアルな描写の積み重ねにある。」

明清の歴史小説と「艶」の概念について